
イーストオブエアー～空気はパンを凌駕する～

kaji

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イーストオブエアー～空気はパンを凌駕する～

【NNコード】

「3498」

【作者名】

ka.ju

【あらすじ】

貧乏でかわいそうな男岡根保志井は幼馴染の山崎小麦からパンを恵んでもらい何とか生きながらえていた。ある日、ついに空腹により意識を失ってしまう。そこである能力に目覚める。

この世には時と場合によつては人を憎むことが許される……気がする。

抜粋（俺）

『保志井の日記』より

憎い憎い。お昼ごはんにジュースを買つやつが憎い。
憎い憎い。放課後にパンを買つて帰るやつが憎い。

俺はその日、毎日の日課である昼食にジュースを買つ人間に呪いをかけるために自販機の近くの影で呪詛を唱えていた。

俺は金が無かつた。なぜなら俺の母親はかなりお金に厳しくて1月のお小遣いを1000円しかくれないのだ。高校生で1000円だぜ。10円チョコ100個も買えないし、ジュースに至つては10本も買えない。母親は男なら1000円で何とかして見せろとか言いながら自分は贅沢三昧で今日もヒマラヤにイエティを見てくると書き置きを置いて勝手に出かけて行つてしまつた。

俺が誰かだつてそんなことははどうでもいいだろうが。まあそまいかないか。一回しか言わないからな。いいな。俺は岡根保志井高校1年だ。まあとにかくこのように母親が家にいなくなつた時は結構頻繁に塩を舐めて生活している。塩こそ人類にとつてかかせないものだ。塩バンザイ。それに加えて水だ。これこそ人類のリーサル・ウェポン。滞納しても水道だけはなかなか止められないなんと話もあるほどだ。それだけ人間にとつては水というものは大切なものだ。俺が柱の影からジュースを買つているやつに呪いをかけていると俺にとつての天使が声をかけてきた。

「また。そんなことやつてるんだ。もつ止めた方がいいよ。みつともない」

その声の主の姿は後光が差してよく見えないが声から察すると俺の幼なじみの山崎小麦やまざきおむぎだ。家がパン屋をやつているのでよく俺にパンを持つてくれる。俺はよく知らないが小麦の実家の山崎なんとかというパンとかいうパン屋は結構有名らしい。家に帰れば捨てるくらいパンがあるというなんとも羨ましいやつだ。前に俺が一生パンを食べさせてくださいとプロポーズしたがあなたと発酵するなんてありえないとパン屋の娘らしい断れ方きりかたをされた。まあとにかく俺に食べ物をくれるとてもいいやつだ。俺はこいつほどいいやつは見たことはない。後光が差してよく見えないがおそらく言葉に表せない程の美人に違いない。性格もよくて容姿端麗ようしほうれいとはなんて神に選ばれた人間なのか。普段世話になつているからこれくらいマイショしておかげいいだろ。言い換えればそうだな。アンパン ンみたいなやつなんだ。

「ねえ。聞いてる？」

「イースト。聞いてるよ。それでなんだつけ？」

「あのねえ。……。まあいいや。お腹空いてるんでしょ。そんなことしてないでアンパンあげるから食べなさい」

「おお。ありがとお。やはり持つべきものは心の友だな。先人もいじことを言つたものだ」

「? ? ? ……。もう行くね」

「ああ。またな。親父さんによろしくな」

「うん。分かった。またね」

俺はもうつたアンパンを食べた。うまいやはりアンパンは粒あんに限るな。こしあんも悪くないがやはり俺は粒あんだ。あの食感がたまら無くいい。アンパンを考案した木村さんに感謝したい。

次の日、俺は奮発して今日は弁当を持ってきた。やつぱりいつも小麦にパンをもらつのは悪いからな。今日は聞いて驚くな。もやしご飯だ。やはり日本人は米に限るだろう。米は昔大流行した外国のブレンド米をお米屋さんから格安で譲つてもらつた。汚染米もあるぞと言われたがそこはさすがに遠慮しておいた。もやしは農薬を一切使つていない自家製のもやしだ。今日摘みとつてきたので新鮮そのものだ。それをさつと「ごま油」で炒めてきた。もやしが「ごま油」に程よく浸かつてとてもおいしそうだ。

「タイのお百姓さん。中国のお百姓さん。日本のお百姓さん。アメリカのお百姓さん。いただきます！」

しつかり生産者の皆様に感謝しながら一粒一粒じつくりと40分程かけて咀嚼した。米は噛めば噛むほど味が出てくるなどと言つ人もいるがその人は本当にしつかりと米を噛んだのだろうか。俺はその味を感じる前に米粒が消えてしまうのだがどうしてだろうか。やはり俺は米に対する愛情というものが足りないかも知れない。日ごろ浮氣して小麦と酵母の「ラボレーション」ばっかり食べているからきっと俺には味が分からないのだろう。

昼食を終えて教室から出ると「ミニ箱」にハンバーガーを捨てている男に遭遇した。こんなエコな時代に食物を捨てるなんてとんでもないやつだ。しかもあれはハンバーグがダブルにチーズが2枚も乗っている。とても高いハンバーガーだ。羨まし、いやこれを捨てるとは許せんやつだ。これは一言言つてやらんといけないな。

「おい。貴様。今ハンバーガーを捨てていただろう。俺は見ていたぞ」

「何？ あんた？」

う。意外と怖そうな男だ。たぶん同級生だと思つがこれから3人ほ

ど殺して来ますわ。と言いたげな目をした男だ。左手をポケットに入れているがきっとあのポケットにはバタフライナイフが入っているに違いない。用心しなければいけないな。

「おい。だから何だ？」

「いや。あのな。そこは燃えるゴミだと言いたくてだな。まあ聞け。ハンバーガーは燃えるゴミじゃないぞ。生ゴミだ。だいたい学校のゴミ箱に食い残しを捨てるなんてどうかしているぞ。いや。いや。そう睨むなって。まあ。聞けよ。お前用務員さんの気持ちを考えたことがあるのか。無いだろう。まあ俺も無いよ。それはまあいい。ちょっと近づかないでくれよ。頼むから俺の1m以内には近づくなよ。まあ待て。待て。それで何だつたかな。ああ。そうだ。用務員さんの気持ちを考えたことがあるか。毎日学校中から集められたゴミを仕分けしてだな。ちゃんと捨てるてくれるんだ。お前はその用務員さんの気持ちを踏みにじっていることになるんだぞ。って。おい。どこのに行く。まだ話は終わっていないぞ」

俺が熱弁をふるつている間にハンバーガー男はどこかに行ってしまった。たかが319文字喋つたくらいでどこかに言つてしまつた。意外と大したことの無いやつだ。ちなみにハンバーガーは後でおいしくいただきました。

俺は放課後に帰りの道すがらに10円チョコを買った。すごく幸せな気分になつた。たまにチョコが無性に食べたくなるのだがどうしてだろうか。チョコレートには中毒作用もあるのだろうか。チョコレート依存症とかあるのだろうか。アルコール依存所とかニコチン依存症などがあるみたいな感じで。今はインターネット依存症などというものもあるからもしかしたらあるのかもしね。知らないけど。

母親がいなくなつて1月程経つたある日、ついに俺にもお迎えが来たようだ。その日は休みの日だったが毎過ぎになつたのだが体が

起き上がるのを拒否しているのだ。お腹が減ったとかそんなことを超越して体がひどく軽い。まるで浮遊しているかのような感覚だ。最後にビックプリンを丸呑してみたかったな。あのカラメルがたまらんのだよなあ。こう右手で持つて一気に流し込んだかったなんて俗物的なことを考えていると突然意識を失つた。

空腹で再び起きた。今時間が分からぬが夕日が射しているのでたぶん夕方くらいだと思つ。どうやらまだ死んでいないようだ。昨日奮発して10円チョコを買ってしまったのが仇となつたかもしれない。やっぱり5円チョコにすれば良かつたな。今となつては動くことができないので小麦にパンを持つてきてもうこともできない。まさかこの飽食の日本で餓死しそうになるとは思わなかつた。餓死したら新聞に載るかな。後、餓死したら小麦はどう思うのだろうか。やっぱり私がプロポーズ受けていればこんなことにならなかつたとかそんなことを思うだらうか。ああ。段々頭の中が真っ白になつてきたぞ。何も考えられなくなる前にこれだけは言わなければいけないな。さよなら。みなさん。お元氣で。あら。まだ意識があるみたいだな。うーん。もう言つことは無いんだがな。さて。どうしようか。よし。それなりこの前覚えた小話でも一つ。昔、昔、あるところにお爺さんとお婆さんが……。

うーん。何だか体がひどく熱い。やめる。それ以上俺の体を熱するな。もう熱くて熱くてしそうがない。これでは体が溶けてしまつ。仕方が無い。起きようか。

田を開けるといつも間にか昼になつていた。とりあえずベッドから起きてみる。体は相変わらず軽いが何かさつきまでの自分と違う気がする。今まで当たり前のように感じていた感覚がないのだ。それは何か。空腹感が無いのだ。満腹感も無いので寝ている間に栄養を摂取したような不可思議要素もない。

とりあえず大きく深呼吸してみる。体に酸素が巡る感覚を感じら

れる。そして、俺の体に活力がみなぎってきた。今までに無い感覚。水を飲んでみる。喉から胃まで流れ込み胃の中に染み渡るような感覚を感じる。体が水分で満たされる。体にパワーがみなぎってきた。これも今までにない感覚。

「マサカ。仙人……」「ふ。ふ。ふ。俺ハ

声を出すとひどくしげられたような声が出た。まるで俺の声じゃないみたいだ。仙人は空気だけで生活できるという話を聞いたことがある。もしかしたら強制的な断食で俺はいつの間にかに仙人になつたのかもしれない。そう思うと今や食べ物などを口にしている人類がひどく愚かに見えた。

俺は仙人の状態のまま学校に登校した。周りの景色が輝いて見える。こんなにも世界は美しいものだつたのか。幸せというものは案外もうすぐ傍にあるものだつたらしい。学校で先生の授業を聞く。いつもの退屈な授業も今日は託宣のように聞こえる。こう聞いていると先生も意外といいことを言つているな。

お昼になるといつものように小麦がパンを持つてきた。今日はいつもよりも豪華な惣菜のパンを持ってくれた。俺はやんわりと拒否する。どうかしたのかと聞かれたが俺はこのように返事をした。

「俺にはこの大気中の空氣があるから問題無い。ああ。教室の空氣は格別にうまいな」

「……」

ひどく怪訝な表情をされた。まあ小麦「」ときには分からんだろう。

「俺から言わせるとだな。お前はまだ下劣なものを食べているのか恥をしれと言いたいくらいだ。ほひ。この空氣のおこしさを感じるんだ」

「へー。そんなに排気ガスで汚れた空気がそんなにいいんですかね」「お前には到底分からんだろうな。まあということでパンはいいからな。俺はこれから思う存分空気を楽しむことにするよ」

「じゃあ勝手にすれば、じゃあね

邪魔者を追い払つたので空気をかみ締める俺。うーん。空気って場所や吸い込み方によつて色んな味が楽しむことができるんだなあ。新しい発見だ。小麦の視線が気になるがまあ。いいだらう。恐らく俺の豹変におかしく思つてゐるのかもしれない。その日は小麦に捕まらないように早々と帰つた。

その日の夜、水道水の塩素をかみ締めていると突然母親が帰つてきた。

「「」あーん。生きてるね。良かつたあ。忘れてた訳じゃないよ。ほら。ほら。お土産買つてきたから許してね」

「どれつと牛肉やらシャケやら何だか分からぬ食材をテーブルに置く母親。紙袋に北海道とか書いてゐるけどヒマラヤヒョウティ見つけにいったんじゃないのか。

「いや。わしはこらんよ。そんなもの」

「何。怒つてるの。ほらこれすごくおこしいよ。現地の人人がね。このシャケ、ヒョウティが捕つたつて言つてたから思わず買つちゃつたの」

「じこまでが本当にじこからが嘘なのか分からなかつたがとにかく俺の口にシャケを押し付けるのだけは止めてくれ。

「止めるー。そんなもの食べるか！」

「何？ そつかあ。やつぱり肉だよね。ほら。これなんてすじくお

いしいよ

なんだかよく分からない串焼きのよつなものを無理やり口に入れられる。

「止める！止める！　あ。汚されるひひひひ。ぐわあああ
「どうしたの？　そんなにうれしがつちやつて。あら氣を失つちや
つた。そんなにおしかつたのかしら」

俺はいつの間にか氣を失つた。そうかと思つとすぐ意識が戻つた。
意識が戻ると俺は狂つたよつて飯を食べた。まるで今までの分を
取り返すよつて

食べに！

食べた！

食べまくつた！

次の日の学校のお昼時間で俺は昨日の母親の残り物の前沢牛のステ
ーキを食べていると小麦がにやにやしながらやつてきた。

「あら。あんた空氣しか食べないんじやないの？」

「何を言つてるんだ。馬鹿女」

「人間の活力というものはな。全て食物から生まれるんだ。例えば
この前沢牛を食べるとする。むしゃ。むしゃ。それが俺の血となり
……むしゃむしゃ……肉となるのだ。なあ俺の言つてることが分か
るだろ？　むしゃむしゃ」

「ええ。よーく。分かったわ。あんたがよつぽどむかつく人間だと

「うう」とかね

「ひがむな。ひがむな。少しばわけてやるつか。」この二陸産のあわ
びとかはどうだ。実においしいぞ」

「どうでもいいけど弁当にそんなものをこれるのはどうかと思つた
どね」

「ほら。あんぱんあげるから」

「け。そんなものいるか」

「後で後悔しても知らないからね。ふん。死んじゃえ」

怒りながら小麦は教室から出て行った。ああ。肉うまいわ。

家に帰るとまた母親は家のどこにもいなかつた。旅行用のバックが
無かつたのでまた旅行に行つたのかもしれない。

「それはねーよおおおおおおおおおおお。マジかアあああ。俺もう。
毎日肉食べないと生きていけないの体なのにいい。どここつた。
あの馬鹿親めええ。携帯。携帯。おかげになつた。つて繋がらねえ
し。嘘だろおおお。まだその辺にいるかもしれん」

俺は必死に母親を探し回つた。探し回ること20分。

「いねええええ！」

見ると冷蔵庫に書き置きがあつた。

ほしちゃんへ

今度はイースター島に行ってくるね
お土産にモアイ像持つて帰るから期待しててね。
じゃあねえー。

母より

「ふざけるなあああ。しかも持つて来れる訳ねえじゃねえか。絶対空港で止められるよ。俺。終わつたああああ！」

俺は書置きを持って崩れ落ちた。今度こそ。俺だめだらつ。その日はたまたまあつた食パンを食べた。うん。やっぱりパンうまいわ。改めてパンのおいしさを噛み締めた。

次の日学校で俺は小麦に懇願していた。

「すいません。小麦さん。アンパンを恵んでくれませんか？」
「あら。昨日はそんなものとか言つていたのにどうしたの？」
「いえ。昨日ようやくアンパンのよさに気がつきました」
「ふーん。そうなんだ。どうしようかなあ」

もつたいてぶつてアンパンをひらりひらりとさせた小麦。ああ。そんなパンを乱暴に扱つては駄目ですよ。あんの風味が失われるじゃないですか。俺は恥も外面も気にせず小麦に頭を下げた。

「そんなこと言わずにお願ひしますよ。小麦さん。俺と小麦さんの仲じゃないですか」
「どんな仲か知らないけど……仕方がない。あげるわよ」
「ありがとう。小麦。大好きだー」
「ちよ。やめてよ」

俺はうれしさのあまり思わず小麦に抱きついていた。アンパンで殴られた。やっぱり最後は持つべきものねパン屋をやっている友達だなと思った。ありがとう。小麦。

I LOVE YOU。

終ります。

(後書き)

「拝読ありがとうございます。」

今回は殆どアドリブで書きました。登場人物は3人しか出てきませんし、殆どが主人公のひとり語りで構成されています。かなり訳の分からぬ話が出来上がりましたがどうも自分はこういった形式の方が得意のようです。一応オチはつけましたがストーリーは無いようなものです。

よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3498j/>

イーストオブエアー～空気はパンを凌駕する～

2010年10月17日01時56分発行